

## 10. 芸術工学部・芸術工学研究院

- I 芸術工学部・芸術工学研究院の研究目的と特徴・10－2
- II 「研究の水準」の分析・判定・・・・・・・・・・10－4
  - 分析項目 I 研究活動の状況・・・・・・・・・・10－4
  - 分析項目 II 研究成果の状況・・・・・・・・・・10－12
- III 「質の向上度」の分析・・・・・・・・・・10－30

## I 芸術工学部・芸術工学研究院の研究目的と特徴

## 1. 研究目的

九州大学学術憲章に記される通り科学技術は自然環境と人類の生存とに重大な影響を与える。本研究院の教育研究理念は「技術の人間化」であり、「技術の独走により人間疎外が生じないよう人間精神の最も自由な発現である芸術と技術の基礎である科学を総合し、その全体的な精神によって技術の進路を計画しその機能を設計する」ことを目的としている。

技術の人間化による共生社会を実現するための様々な知恵を発揮できる設計家（高次のデザイナー）を育成し、その理念を具体化するため人文・社会科学から科学技術にわたる幅広い知識と論理性、また芸術的感性と倫理性に関する研究を行う。本研究院は平成 25 年に「感性研究」「しくみ設計」「イノベーション創出」というミッションの再定義を行った。これらは高次のデザインにより技術の人間化を具体化するためのキーワードである。

## 2. 研究成果に関する方針

本研究院の研究は多様で、成果の形態も論文に限らず多様である（資料 1）。

## ○資料 1 研究成果に関する方針（OP、アウトカム・ポリシー）

人文社会・科学技術等の分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>論文・著書、特許、学会発表を通じて社会に公表する。</li> <li>科学技術の分野は英語による国際学会、ジャーナル等への発表を重視する。</li> </ul>
デザインの計画・実践と芸術表現の分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会的関連性を重視し、産学連携活動、自治体とのコラボレーション等における高次のデザイン実践を行う。</li> <li>行政への提言や製品・サービス・コンテンツのデザイン、様々なアートの企画制作等において社会に貢献する。</li> <li>コンペティションへの積極的な応募を推奨する。</li> </ul>
研究の国際的展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>西欧に限らずアジアの国々とも連携を深める。</li> <li>グローバルな視点からの問題解決に貢献する。</li> </ul>

## 3. 研究組織運営に関する方針（資料 2）

## ○資料 2 研究組織運営に関する方針（MP、マネジメント・ポリシー）

研究組織・体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>分野の近い研究者で 5 つの部門を組織し、共同研究や大型外部資金への申請を活性化させる。</li> <li>三つの研究センター（応用知覚科学研究センター、応用生理人類学研究センター、ソーシャルアートラボ）及び本学リサーチコアを支援し、他の部局・大学を交えた研究者の結集を加速する。</li> </ul>
支援・推進体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>各研究センターへ運営費を配分する。</li> <li>学術研究推進支援機構の協力を得て、大型外部資金への応募や、各種外部資金による学際的な共同研究の推進等の支援を行う。</li> <li>サバティカル制度や芸術工学研究院教員海外派遣制度を活用し、教育研究の発展を支援する。</li> </ul>
内部質保証（評価・改善）	<ul style="list-style-type: none"> <li>計画・評価委員会による中期目標・計画の進捗状況の点検・評価を通じ、組織的な取り組みの改善につなげる。</li> <li>教員活動評価委員会による教員の教育研究活動の点検・評価を通じ、その改善を支援する。</li> <li>外部評価の資料となる自己点検・評価を定期的に行い、結果を報告書にまとめる。</li> </ul>
情報公開	<ul style="list-style-type: none"> <li>各部門・研究センターは Web ページを整備し、多国語で研究活動等の情報を公開する。</li> <li>施設公開事業やオープンキャンパスにより、研究の現場を公開する。</li> <li>公開講座にて地元の中高校生や一般市民に、また、出前授業により遠方まで広く研究を公開する。</li> <li>査読つき紀要「芸術工学研究」を年 2 回発刊し研究成果を公表する。</li> </ul>

## 4. 研究基盤整備に関する方針（資料3）

## ○資料3 研究基盤整備に関する方針（IP、インフラストラクチャー・ポリシー）

インフラ	取組の概要
研究施設・設備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老朽化した校舎を、プロジェクト研究に適した汎用性のある仕様に改修・整備する。</li> <li>・情報セキュリティに配慮したネットワークの整備を行う。</li> <li>・デジタルファブリケーションを研究教育に導入する。</li> </ul>
研究資金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や自治体との共同研究、受託研究、寄附金、科学研究費補助金（科研費）等官公庁からの競争的資金の獲得を推進する。</li> <li>・大型科研費（基盤研究（A）、（S））等の戦略的獲得を目指す。</li> <li>・部局の分野に最も関連するデザイン学の細目に積極的に貢献する。</li> <li>・学術研究推進支援機構との連携により、研究目的に沿った大型外部資金獲得を目指す。</li> </ul>

## 5. 強みと特色

主な強みは資料4の通りである。これらの強みが「技術の人間化」の理念のもと、よりよい人間生活や福祉と結びついていることが大きな特色である。

## ○資料4 強み

強み	概 要
学際性	人文・社会、工学、デザイン実践等、多分野の研究者が結集する。
一貫性	基礎・理論的研究から応用としてのデザイン実践まで扱う。
アウトプットの多様性	研究成果は論文に限らず、映像や音楽等のコンテンツ、建築、イベントの企画、社会システムのデザイン等に及ぶ。
国際性	研究テーマや、外国雑誌への成果発表、国際的なコンペティションでの受賞等国際的な活動を活発に行う。

以上の研究目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「研究においては、卓越した研究者が集い成長していく学術環境を充実させ、世界的水準での魅力ある研究や新しい学問分野・融合研究の発展及び創成を促進する。また、環境・エネルギー・健康問題等人類が抱える諸課題を総合的に解決するための研究を強力に推進し、国際社会・国・地域の持続可能な発展に貢献する。」を踏まえている。

## [想定する関係者とその期待]

「技術の人間化」に国内外の諸学界から大きな期待がある。感性研究、しくみ設計、イノベーション創出のミッション再定義に基づく実践的な研究成果の還元を、民間企業・産業界、国、地方自治体、国際社会、地域社会から求められている。市民への研究成果の公表も期待されている。

## Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定

## 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

## 観点 1-1 研究活動の状況

(観点に係る状況)

## 1-1-1 組織編成

MP に沿い、5 部門 17 講座を組織し (資料 5)、「技術の人間化」を実現するため、人間の生理・心理・動作等の特性の研究、情報処理・ネットワーク等のデジタル技術の研究、デザインの思想等に関わる基礎的研究からソフトウェアを含む製品、社会システム、環境デザイン、地域の文化遺産の保存、新しい技術を背景とした新たなアートの展開、アートによる社会貢献、デザインのビジネス展開等基礎から応用まで幅広い学問分野で研究を行っている。実践的研究や社会への還元を推進するため部門を基礎としつつ他部局との連携も図り、柔軟に研究グループを編成している。

## ○資料 5 教員構成

平成 27 年 5 月 1 日現在

部 門	講 座	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計
デザイン人間科学	生理人類学、知覚心理学、モデリング・最適化	8	6	0	4	18
コミュニケーションデザイン科学	音文化・アートマネジメント、音響デザイン学、情報音響システム、画像情報工学	9	8	0	5	22
環境デザイン	ランドスケープ・社会環境デザイン、構築環境デザイン、建築史学・文化財学	6	8	0	3	17
コンテンツ・クリエイティブデザイン	芸術、クリエイティブデザイン、コンテンツデザイン、インタラクティブデザイン	6	11	0	4	21
デザインストラテジー	ソーシャル・システムデザイン、ソーシャル・イノベーションデザイン、ソーシャル・コミュニケーションデザイン	3	9	0	1	13
教員総数		32	42	0	17	91

## 1-1-2 研究の実施状況

## 1-1-2-① 論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

論文・作品等の発表状況を資料 6 に示す。原著論文の総数は 6 年間で 1,200 件を越え約 90% は査読付きである。このうち 665 本を外国語で執筆、613 本を国際誌に発表。年間 1 人あたり 1.99 本の査読論文、うち 1.12 本の国際誌論文を発表し国際的な学術活動を活発に展開している。第 1 期では年間 1 人あたり査読論文 1.60 本、国際誌論文 0.85 本であったので、第 2 期では着実に業績が伸びている。

著書は 6 年間の総数で 165 件、うち単著が約 17% を占める。外国語による著作も 6 年間で 18 件と、国際的な学術の発展に貢献した。

その他、報告書等は 6 年間の総数で 421 件を数え学際的共同研究プロジェクトや政策形成などの調査研究を数多く実施。解説や論評なども多岐にわたり様々な分野での社会貢献を活発に行っている。

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

本研究院の特色として6年間で総数 349 件（年平均 58 件）の作品発表があり、芸術作品の制作、実践的な計画・設計等多岐に及ぶ独創的な創作活動により成果の社会還元を行う。「博多駅博多口駅前広場」等の大規模なものを含め 13 件のグッドデザイン賞受賞に代表される高い評価を受けている（後掲資料 24～25、19～29 頁）。

以上 OP に沿った状況である。

### ○資料 6 主要な論文・著書・作品等の状況

（大学評価情報システムより集計。複数教員による共著については、重複カウント）

	原著論文						著書				総説・報告書				作品等	
	全数	査読あり	外国語	国際誌	招待	学生共著	全数	原著	単著	外国語	全数	報告書	外国語	学生共著	作品	学生共著
平成 22～27 年度	1,218	1,084	665	613	61	539	165	145	28	18	421	146	7	32	349	76
年間 1 人当たり	2.23	1.99	1.22	1.12	0.11	0.99	0.30	0.27	0.05	0.03	0.77	0.27	0.01	0.06	0.64	0.14

学会報告等の状況を資料 7 に示す。発表総数は 6 年間で 3,356 件、うち国際会議が約 24% あり国際的な活動が活発である。シンポジウムや招待講演は 6 年間で各 277 件、327 件に及び、社会的要請に積極的に応えている。学生との共同発表も活発である。

学会での主導的役割となる座長・コーディネーターは 6 年間の総数で 518 件、特に国際会議は 97 件で国際的な貢献が増大した。

以上 OP に沿った状況である。

### ○資料 7 主要な学会報告等の状況

（大学評価情報システムより集計。複数教員による共著については、重複カウント）

	学会発表等					座長・コーディネーター等	
	全数	国際	シンポジウム	招待	学生共同	全数	国際
平成 22～27 年度	3,356	802	277	327	2,033	518	97
年間 1 人当たり	6.15	1.47	0.51	0.60	3.72	0.95	0.18

## 1-1-(2)-② 競争的資金、共同研究、受託研究、寄附金等の受入・実施状況

科学研究費補助金（代表分）の獲得件数・金額を資料 8、9 に、他の外部資金を資料 10、11 に示す。年平均 151 件、金額で 3 億円以上のプロジェクトが定常的に進行し科研費は約 2 億円を占める。期間中に基盤（A）、（B）が年々増加し獲得金額が 1.8 倍に増加しており、「デザイン学」の細目設定（平成 25 年度、平成 22～24 年度は時限付き）、三つの研究センターの設置、組織的な申請支援を反映している。資料 9 は実施した基盤研究（S）、（A）を示す。細目ではデザイン学、応用人類学、実験心理学が多く人間の基礎研究から応用研究までカバーする。一方、特別研究員奨励費、若手研究（A）、（B）、研究活動スタート支援を常に 15 件以上実施し中堅以上と若手研究者のバランスが良い。

本研究院と密接な関連がある細目「デザイン学」では平成 22 年度からの通算採択総数は、本学が 39 件と全国 1 位であり、2 位の大学の 17 件を大きく上回る。特に基盤（A）では 9 件中 4 件、基盤（B）では 27 件中 6 件が本研究院で採択されるなど大型になるほど本研究院の強さが顕著である。一方、「デザイン学」の基礎である人間の生理・心理的特性を研究する分野、つまり「応用人類学」（基盤（A）6 件）と「実験心理学」（基盤（S）1 件、

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

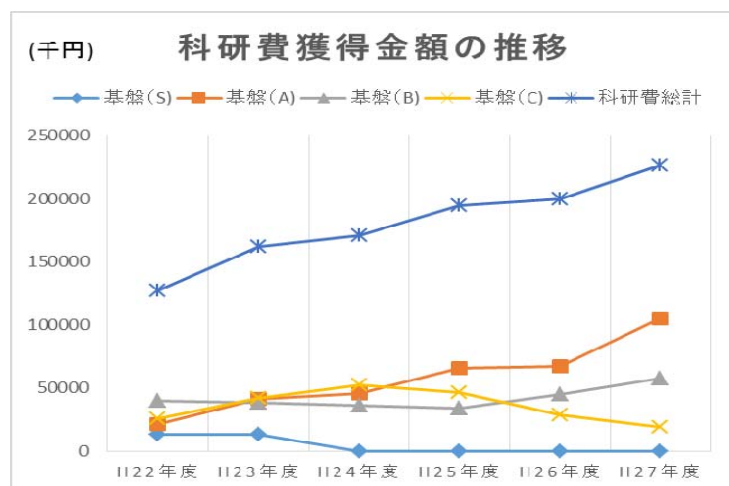
基盤 (A) 2 件) の細目においても実績が顕著であり、「技術の人間化」を標榜する本研究院の特色を際立たせている。

これらは IP に沿い、OP、MP の成果でもある。

## ○資料 8 科学研究費補助金の獲得状況 (平成 22～27 年度) (単位: 千円)

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
新学術領域	0	0	0	0	1	(900) 3,900	1	(900) 3,900	0	0	0	0
基盤 (S)	1	(3,060) 13,260	1	(3,150) 13,650	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤 (A)	2	(4,950) 21,450	4	(9,510) 41,210	3	(10,650) 46,150	6	(15,150) 65,650	6	(15,570) 67,470	9	(24,240) 105,040
基盤 (B)	9	(9,150) 39,650	7	(8,910) 38,610	8	(8,310) 36,010	6	(7,770) 33,670	9	(10,410) 45,110	11	(13,380) 57,980
基盤 (C)	22	(6,000) 26,000	27	(9,780) 42,380	36	(12,060) 52,260	33	(10,770) 46,670	24	(6,810) 29,510	17	(4,470) 19,370
若手 (A)	0	0	0	0	1	(540) 2,340	1	(1,470) 6,370	2	(3,660) 15,860	2	(1,770) 7,670
若手 (B)	9	(3,390) 14,690	5	(1,830) 7,930	4	(1,920) 8,320	6	(1,080) 5,380	8	(2,130) 9,230	8	(2,250) 9,750
挑戦的萌芽	5	6,200	7	(2,580) 11,180	10	(3,660) 15,860	17	(5,700) 24,700	17	(5,730) 24,830	17	(5,100) 22,100
特別研究員奨励費	4	3,300	5	4,200	6	4,900	8	6,900	6	(540) 6,440	4	4,200
研究活動スタート支援	2	(573) 2,483	1	(360) 1,560	1	(270) 1,170	1	(330) 1,430	1	(330) 1,430	0	0
計	54	(27,123) 127,033	57	(36,120) 160,720	70	(38,310) 170,910	79	(43,170) 194,670	73	(45,180) 199,880	68	(51,210) 226,110

※ 金額欄の上段括弧書きは、間接経費で内数



## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

## ○資料 9 平成 22 年度以降に実施した基盤研究 (S) 及び基盤研究 (A)

課題名	期間	代表者	研究分野	研究種目
元気な高齢者の QOL 向上のための日常生活情報を利活用したサービスデザイン研究	平成 27 年 4 月 1 日～30 年 3 月 31 日(予定)	田村 良一	デザイン学	基盤研究 (A)
視覚経験を生み出す眼と脳と身体との連携	平成 27 年 4 月 1 日～31 年 3 月 31 日(予定)	伊藤 裕之	実験心理学	基盤研究 (A)
子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究	平成 27 年 4 月 1 日～31 年 3 月 31 日(予定)	樋口 重和	応用人類学	基盤研究 (A)
地域生態系の枠組みにおける森林消失と貧困の関係の研究	平成 27 年 4 月 1 日～30 年 3 月 31 日(予定)	谷 正和	文化人類学 ・民俗学	基盤研究 (A)
日本人の寒冷適応能を構成する遺伝的要因と生理的要因の検証	平成 26 年 4 月 1 日～29 年 3 月 31 日(予定)	綿貫 茂喜	応用人類学	基盤研究 (A)
公共空間における音響放送の改善：知覚的相互作用を考慮した音デザイン	平成 25 年 4 月 1 日～30 年 3 月 31 日(予定)	中島 祥好	デザイン学	基盤研究 (A)
高齢者向けロコモ対策用ゲームの開発を通じたゲームデザイン研究	平成 25 年 4 月 1 日～28 年 3 月 31 日	松隈 浩之	デザイン学	基盤研究 (A)
デジタルイメージ創成を通じた論理的思考に基づく芸術的感性の育成	平成 25 年 4 月 1 日～28 年 3 月 31 日	源田 悦夫	デザイン学	基盤研究 (A)
ゲノム情報・生理的多型性・行動からみた光環境における遺伝的及び可塑的適応性の評価	平成 25 年 4 月 1 日～30 年 3 月 31 日(予定)	安河内 朗	応用人類学	基盤研究 (A)
順応による知覚的世界の適応的変容	平成 23 年 11 月 18 日～27 年 3 月 31 日	伊藤 裕之	実験心理学	基盤研究 (A)
現代日本人の生理的多型性を構成する遺伝的要因の検証	平成 23 年 4 月 1 日～26 年 3 月 31 日	綿貫 茂喜	応用人類学	基盤研究 (A)
地球温暖化と人工環境普及に伴う人類の暑熱適応能の変化に関する研究	平成 21 年 4 月 1 日～25 年 3 月 31 日	栃原 裕	応用人類学	基盤研究 (A)
現代の生活環境における行動履歴が生理的多型性に及ぼす影響、及びその適応性評価	平成 20 年度～23 年度	安河内 朗	応用人類学	基盤研究 (A)
言語情報伝達における連続性と分節性：知覚心理学、言語学、音声科学の融合	平成 19 年度～23 年度	中島 祥好	実験心理学	基盤研究 (S)

## ○資料 10 その他競争的資金受入状況

競争的資金の種別		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
補助金	件数	1	1	1	1	1	1
	金額	47,188,631	41,955,934	8,301,000	18,000,000	10,000,000	20,000,000
	事業名	科学技術戦略推進費補助金	科学技術戦略推進費補助金	環境研究総合推進費補助金	文化芸術振興費補助金(大学を活用した文化芸術推進事業)	地域産学官連携科学技術振興事業費補助金(COI ビジョン)	文化芸術振興費補助金(大学を活用した文化芸術推進事業)

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

## ○資料 11 受託研究、共同研究、寄附金の受入状況（単位：千円）

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
受託研究	9	108,953	10	111,728	13	91,667	12	52,312	17	57,741	12	27,967
共同研究	69	62,384	64	70,012	54	57,420	48	47,217	41	47,270	43	62,350
寄附金	22	11,740	17	9,370	17	11,045	22	12,946	19	18,534	23	14,136
計	100	183,077	91	191,110	84	160,132	82	112,475	77	123,545	78	104,453

本学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）及びリサーチコアの実施状況を資料 12 に示す。代表者は本研究院の 5 部門全てにわたる。また基礎から応用までの学問分野にわたり、実践的な研究と社会への還元を標榜する本研究院の研究目的及び中期目標の達成に向けて、企業や地方自治体との共同研究や受託研究を推進している。以上 MP に沿った状況である。

## ○資料 12 教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&amp;P）及びリサーチコアの実施状況（平成 22～27 年度）

	実施年度	研究タイプ	研究課題	研究代表者	所属	系
教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト	平成 22 年度	特別枠： 機動的プログラム・プロジェクト支援	メディア芸術に関する造形教育方法についての調査研究	源田悦夫	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	
	平成 23 年度	特別枠： 機動的プログラム・プロジェクト支援	ミトコンドリア DNA 解析を迅速化及び確実化する方法の検討	綿貫茂喜	デザイン人間科学部門	
	平成 23 年度～平成 24 年度	E-2 タイプ： 人文・社会科学及び基礎科学	運動錯視による視覚情報処理過程の解明	伊藤裕之	デザイン人間科学部門	人社
	平成 24 年度	D-2 タイプ： 若手スタートアップ	水辺の信仰空間に関する都市・建築史的研究	岸 泰子	環境デザイン部門	理工農
	平成 24 年度	D-2 タイプ： 若手スタートアップ	概日リズムのフィードバック制御系の構築	伊藤浩史	デザイン人間科学部門	理工農
	平成 24 年度	D-3 タイプ： ポスト研究奨励費	主観的時間の伸縮と処理の階層性	富松江梨佳	デザイン人間科学部門	人社
	平成 24 年度	E-1 タイプ： 人文・社会科学におけるプロジェクト型研究のスタートアップ支援	小型・超小型小水力発電を活用した地域環境デザインの確立に関する計画論的研究	包清博之	環境デザイン部門	学際・複合・新領域
	平成 24 年度	E-2 タイプ： 人文・社会科学及び基礎科学	人は音声の何をきいているのか	上田和夫	デザイン人間科学部門	人社
	平成 24 年度	E-2 タイプ： 人文・社会科学及び基礎科学	歴史系博物館におけるゲーム性を取り入れた参加型展示支援システム	金 大雄	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	学際・複合・新領域
	平成 24 年度～平成 25 年度	E-3 タイプ： 特定プロジェクト型研究	リハビリ支援ゲームの開発評価拠点構築のための先行研究	松隈浩之	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	学際・複合・新領域
教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト	平成 24 年度～平成 25 年度	A タイプ： 本学の COE 研究	文理融合型の知覚・認知研究拠点	中島祥好	デザイン人間科学部門	学際・複合・新領域
	平成 25 年度	F タイプ： 大型科研費種目リターンポート	ユニバーサルミュージアム論の実践的研究	平井康之	デザイン戦略部門	学際・複合・新領域
	平成 25 年度～平成 26 年度	E-4 タイプ： 特定プロジェクト型研究	地域の音楽文化創成のための文理融合的視点による持続可能なコンテンツの提案	尾本 章	コミュニケーションデザイン科学部門	学際・複合・新領域
	平成 26 年度	FS タイプ： 外国人教員支援	Cortical processing of mosaic speech	Remi jin Gerard	デザイン人間科学部門	人社



## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

			Bastiaan		
平成26年度	特別枠Ⅲ： 人文・社会科学及び文 理融合研究奨励	タイプフェイスの類似と法的保護 のあり方—認知科学的類似と法的 類似の比較から—	麻生 典	コンテンツ・クリエ ティブデザイン 部門	
平成26年度～	TT タイプ： フェルトワーク制教員支援	バクションの包括的研究	妹尾武治	高等研究院	人社
平成27年度	特別枠： つばさプロジェクト	インターネットによる大学講義の 提供—法解釈と技術による課題解 決の模索と大学経営への示唆—	麻生 典	コンテンツ・クリエ ティブデザイン 部門	
平成27年度	特別枠： つばさプロジェクト	被災地におけるレジリエンスデザ イン研究 —人文社会学から理工 学への課題提言拠点へ	尾方 義人	デザインストラ ジー部門	
平成27年度	特別枠： つばさプロジェクト	次世代に向けた地域オーケストラ の社会・文化的役割とマネジメン トの提言	西田 絢子	コミュニケーション デザイン科学 部門	
平成27年度	特別枠： つばさプロジェクト	ストレスを軽減する英語パブリッ クスピーキング指導法の新規開 発：応用言語学・英語教育学・心 理学による統合的研究	冬野 美晴	コンテンツ・クリエ ティブデザイン 部門	
教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト (P&P) 教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトは、一定の期間、研究費等の重点配分を行い、教育と研究の一層の発展を図ることを目的とする本学独自の研究支援制度であり、集中的に支援することで、研究の一層の発展を促し、新たな競争的資金の獲得の原動力となっている。					

## 1-1- (3) 社会貢献の状況

資料 13 のとおり学会役員等を通して学術貢献が多数あり、教員の研究活動に対する信頼を示している。

## ○資料 13 主要な学会役員等の状況 (大学評価情報システムより抜粋)

該当年度	学会役員		編集委員等		論文査読	
	全数	国際	全数	国際	全数	外国語雑誌
平成 22	63	8	29	8	257	106
平成 23	53	5	36	11	242	112
平成 24	94	8	38	5	226	77
平成 25	102	10	34	5	223	88
平成 26	93	10	20	4	194	79
平成 27	95	24	35	8	246	131
計	500	65	192	41	1,388	593

	認定日	コアの名称	人数	研究代表者	所属	分野
リ サ ー チ コ ア	平成16年3月26日	ユニバーサル・デザインの研究リサーチ コア	12	平井康之	デザインストラ ジー部門	学 際・ 複 合・ 新 領 域
	平成16年3月26日	アート・インターフェース創成リサーチ コア	22	土居義岳	環境デザイン部 門	
	平成16年11月19日	感覚特性に基づく人工環境デザイン リサーチコア	19	安河内 朗	デザイン人間科 学部門	
リサーチコアは本学が世界有数の中核研究拠点 (Center Of Excellence: COE) となることを目指した独自の研究支援制度であり、COE 形成の推進に相応しい研究グループを正式に認定し、研究活動、研究費申請、人材流動化、講演会などの対外活動を支援している。						

主要な社会貢献を資料 14 に示す。社会システムのデザイン実践の場として、政策形成・

九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目 I

学術振興に関わる審議会委員等が年平均 90 件と活発である。本研究院の教員の約 4 割は民間企業等での実務経験があり（資料 15）、委員会では各自の専門性ととともに、前職で培われた総合調整力や発想の柔軟性等、デザインに関わる理論と実践のバランスが期待され、自治体での委員就任の理由となっている。

公開講座の開催、講演依頼も年平均 130 件を数え、本学の全公開講座の約 4 割に上り、これは本研究院に対する社会的な評価と期待を表し、研究成果の社会還元に大きく貢献、OP に沿っている。

○資料 14 主要な社会貢献の状況（大学評価情報システムより抜粋）

該当年度	全数	政策形成・学術振興			新聞TV コメント等	公開講座・ 講演会等	中高教育 貢献
		中央省庁	自治体	文科省委員			
平成 22	301	6	32	2	89	143	29
平成 23	291	8	44	3	61	126	49
平成 24	388	5	85	2	75	153	68
平成 25	450	8	106	2	86	175	73
平成 26	373	8	92	2	88	114	69
平成 27	358	8	128	3	41	108	70
計	2,161	43	487	14	440	819	358

○資料 15 実務経験を有する教員の配置状況（平成 27 年 5 月 1 日現在）

教員の職種、及び実務経験内容	
実務経験の内容（主なもの） 教授：デザイン分野での企画等に関わる実務経験 教授：デザインイノベーションに関わる実務経験 教授：プロジェクトマネジメントデザインに関わる実務経験 准教授：デザインインテグレーションに関わる実務経験	
現職種 36 人	実務経験の具体的な職種名（主なもの） 【特に本学部の特色を顕著に示しているものに下線を引く。】
教授 14 人	建設機械メーカーの研究開発部の研究開発員 自動車メーカーの <u>デザイン部のエクステリア・インテリア・アドバイザー</u> 自動車デザイン企業の <u>デザインセンターのシニアデザイナー</u> インダストリアルデザイン研究所の <u>デザインセンターのグラフィックデザイナー</u> データ処理サービス会社の取締役 建設関連会社の技術研究部部长 フリーランス作曲家 広告会社のプランナー・企画職・ディレクター・部長
准教授 19 人	出版会社の <u>デザイン編集部記者</u> フリーランス編集者 ウェブ制作会社のプロデューサー 電気通信関連企業のマネージャー 都市・建築設計研究所の設計業務 設計事務所の建築設計・管理業務 百貨店の外商事業部建築部設計管理担当 金属加工企業の <u>デザインデザイナー・ディレクター</u> 画家 ソフトウェア会社の指導員・ディレクター・コンテンツ課長 電器メーカーのカテゴリーリーダー 青年海外協力隊の美術隊員 製薬会社の情報システム部員 電器メーカーのシステム設計部企画員 建設会社の建築職 地方自治体の文化観光局の美術学芸員
助教 3 人	フリーランスアートディレクター ネット販売会社の <u>デザイナー</u> ユネスコの文化遺産専門国連ボランティア ユネスコの文化遺産協力保護事務所のコーディネーター

	キャド制作会社のデジタルアーカイブ・ラボ研究員
--	-------------------------

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

論文・著書や学会報告等は前掲資料6、7(5頁)の通り相当の蓄積がある。外国語による発表や国際誌・国際会議での報告等、国際的な学術活動も活発に展開し、その発展に寄与している。論文の約半数は学生との共著であり、教育と研究がうまく繋がっている(前掲資料6、5頁)。著書や論文に対する受賞も多い。

調査報告書や作品等は、本研究院の目的に即したもので相当の蓄積がある。社会的要請に基づく調査報告書は政策形成に結び付き、審議会や講演会等の活動状況は高い水準にある(前掲資料14、10頁)。芸術作品や計画・設計作品も受賞が多数(後掲資料25、19～29頁)ある。三つのセンターとリサーチコア、本学P&Pプログラム(資料12、8～9頁)を軸に学術的な共同研究を複数展開し、地方自治体や企業との実践的な共同研究も途切れることなく展開している。

外部資金の受入れは資料8、10、11(6～8頁)の通り恒常的に3億円規模である。主に競争的資金(科研費等)の採択が伸びている。これは活発な研究を定常的に行っていることを示している。

本学の公開講座の約4割を本研究院が行うなど市民に対する活動も活発である。

以上により本研究院の研究ポリシーに基づいた取組や活動の状況は、想定する関係者の期待する水準を上回ると判断する。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## 観点 2-1 研究成果の状況

(観点に係る状況)

## 2-1-1 学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況

人間の基礎的研究からデザイン実践まで有機的な連携を行うところに、組織としての本研究院の特色と強みがある。応用知覚科学研究センター（資料 16）、応用生理人類学研究センター（資料 17）は人間の心理・生理的側面を研究し、デザインの基盤を作っている。ソーシャルアートラボ（資料 18）やシリアスゲームプロジェクトは、アートやゲームで社会の問題を解決するための実践的活動である。デザイン思考によるワークショップや公共空間のデザインなど一般市民と直接接する部分での研究成果の還元も本研究院の特色といえる。

## 1. 応用知覚科学研究センター設置

## ○資料 16 応用知覚科学研究センターの概要（平成 25 年 4 月設置）

環境や物、情報を人が受容する過程を解明し、知覚現象を脳活動と関係付ける「知覚科学」の確立を目指す。特に聴覚と脳活動に関する研究を精力的に行う。

本センターの主な業績として、動くものの見え方と脳の情報処理を関連付けた論文（PNAS（IF=9.67）に掲載、資料 19、13 頁太字部分）等、高インパクトファクタの雑誌に発表。感性とコンピュータによるデザインを統合する進化計算の手法に関する学会発表も高い評価を受けた（資料 20、14 頁太字部分）。

## 2. 応用生理人類学研究センター設置

## ○資料 17 応用生理人類学研究センターの概要（平成 26 年 8 月設置）

技術・情報の革新と適応可能な環境との乖離による健康リスク等の問題を解決するため、人の生物学的適応を研究。実験室実験に加え地域住民に対するフィールド実験も行う。

本センターの主な業績として、子どもは夜の光の影響を受けやすいことを初めて示した論文（The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism（IF=6.21）に掲載、資料 19、13 頁太字部分）等、高インパクトファクタの雑誌に発表している。

## 3. ソーシャルアートラボ設置

## ○資料 18 ソーシャルアートラボの概要（平成 27 年 4 月設置）

社会の課題にコミットし人間同士の新しいつながりを生む芸術実践をソーシャルアートと捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて新しい生の価値を提示する。科学技術振興調整費「ホルママネジメントエンジニア育成ユニット」、文化庁「ホルママネジメントエンジニア養成講座」「芸工パフォーミングアーツ・プロジェクト」を母体としている。平成 25 年九州大学 P&P プログラム「地域の音楽文化創成のための文理融合的視点による持続可能なコンテンツの提案」に採択された。

本ラボでは、独自に開発した反射率可変音響壁面システムをコンサートに使用し、工学的発明を芸術表現の場で検証した論文は独創的で本研究院の特徴をよく表している（後掲資料 22、16 頁太字部分）。

## 4. デザイン思考の展開

「子供かける薬かけるデザイン実行委員会」と企業の共同で、子供や保護者の精神・身体的負担を軽減し、服薬のデザインの可視化を目的とした研究を実施した。ユーザー参加型デザイン手法を用い、メインユーザーの小学生と共に「課題」の抽出、プロトタイプ製作、検証、ブラッシュアップをする中で課題解決を検討する指標として「安心・安全」、「便利・適応」、「心地・感動」の観点から整理し、デザイン解決策の提案を行い、キッズデザイン賞及びグッドデザイン賞を受賞している（資料 25 の 20、25、28 頁太字部分）。

## 5. 生理特性に基づく製品の開発

パナソニックと共同で「エコサーカディアン照明システム」を開発した。オフィスの生産性を維持しつつ労働者の生体リズムを健全に調整する照度と分光分布の制御方法を提案し、かつエネルギー消費を節減する画期的な照明システムを製品化し、オカムラと共同開発した「次・オフィスライティングシステム」は日経新聞主催の第 24 回日経ニューオフィス賞（2011 年）を受賞した。

また各種振動や音刺激が乳児に及ぼす鎮静効果を科学的に探求し、揺動型ベビーベッド「スイマ」として製品化して社会的に大きな注目を集めた（資料 21、14 頁太字部分）。

## 6. シリアスゲームプロジェクト

産学官連携でシリアスゲーム（社会の諸領域の問題解決に利用されるデジタルゲーム）の研究開発を行った。高齢者向けリハビリ・ヘルスケア用シリアスゲームの論文は情報技術とエンタテインメントの融合研究として学術・産業界から注目され、平成 25 年度山下記念研究賞を受賞。医療機関、介護施設にて有用性・安全性を検証し平成 25 年に商品化した「リハビリウム起立くん」は多数のメディアで紹介され全国約 50 施設が利用しており、平成 27 年ヘルスケア産業づくり貢献大賞を受賞した（資料 23、17 頁太字部分）。

## 7. まちづくりのデザイン

自治体や企業によるまちづくりや道路、景観等の整備プロジェクトにデザイン、設計、監修等で参加。大規模なものに JR 博多口駅前広場のデザインがある。平成 23 年の九州新幹線全線開業に伴いアジアの玄関口として博多の魅力を象徴する広場を実現した（資料 23、18 頁太字部分）。街の賑わいの核として文化を育む市民のための広場を創造し平成 23 年度グッドデザイン賞を受賞した。

以上の成果は本研究院の OP に沿う。

## ○資料 19 組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等

研究者	タイトル	掲載誌	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
Higuchi S., Nagafuchi Y., Lee S. I., & Harada, T	Influence of light at night on melatonin suppression in children.	The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism	子どもが大人に比べて約 2 倍も夜の光の影響を受けやすいことを初めて明らかにした研究であり、国際的評価の高い雑誌（インパクトファクタ 6.21）に掲載されている。
Wexler M., Glennester A., Cavanagh P., Ito H., & Seno T.	Default perception of high speed motion	Proceedings of the National Academy of Sciences	人間が視覚的な動きを知覚する際、まばたき等により一瞬の間に目標を見失うと、探索的な動きの知覚を行うことを、運動錯視によって示した。国際的に評価の高い雑誌（インパクトファクタ 9.674）に掲載されている。
Kuroda T., Nakajima Y., & Eguchi S.	Illusory continuity without sufficient sound energy to fill a	Journal of Experimental Psychology: Human	伝統的な実験心理学の分野で最も権威ある雑誌（インパクトファクタ 3.358）に掲載された。

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

	temporal gap: Examples of crossing glide tones	Perception and Performance	
Ito H.	Cortical shape adaptation transforms a circle into a hexagon: a new afterimage illusion	Psychological Science	視覚の残像においては、反対色が見える だけではなく、形にも変化があることを 示し、残像の見えは網膜によって決定さ れているわけではないことを証明した。 国際的に評価の高い雑誌（インパクトフ ァクタ 4.940）に掲載されている
Tochihara Y., Lee JY., Wakabayashi H Wijayanto T., Bakri I., & Parsons K.	The use of language to express thermal sensation suggests heat acclimatization by Indonesian people	International Journal of Biometeorology	暑熱適応・脱馴化に関する生理人類学的 研究で、多数の熱帯地住民の温冷感特性 を初めて明らかにした点で評価が高い。 国際的に評価の高い雑誌（インパクトフ ァクタ 3.246）に掲載された。
Fujihira H. & Shiraishi K	Correlations between word intelligibility and speech auditory brainstem responses in elderly listeners	Clinical Neurophysiology	国際的に評価の高い雑誌（インパクトフ ァクタ 3.097）に掲載された。
Seno T., Kawabe T., Ito H., & Sunaga S.	Vection modulates emotional valence of autobiographical episodic memories	Cognition	視覚的に誘導された自己運動感覚によっ て、想起された記憶の感情価が変化する ことを示した。認知心理学分野で伝統あ る国際的評価の高い雑誌（インパクトフ ァクタ 3.479）に掲載された。

## ○資料 20 組織単位での研究成果の質の高さを示す学会報告等

研究者	タイトル	学会名	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
Pei Y., & Takagi, H.	Comparative study on fitness landscape approximation with Fourier transform	6th Int. Conf. on Genetic and Evolutionary Computing (ICGEC2012)	「第6回遺伝的及び進化計算に関する国 際会議（ICGEC2012）」で Best Paper Award を受賞した。145編中の第1位の最優秀論 文である。

## ○資料 21 組織単位での研究成果の質の高さを示すその他の研究活動

研究者	タイトル	学会名	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
Iwamiya S.	Chapter 7: Perceived congruence between auditory and visual elements in multimedia	書名: The Psychology of Music in Multimedia	国際的に権威のある Oxford University Press の学術書の1章に、映像につける音の デザインに関して研究成果を著した。製品音 のデザインに関連する指標は実際に企業の 評価基準として用いられ、共同研究、セミナー、 コンサルティング業務などを通じて社会 貢献を果たしている。
岸 泰子	近世の禁裏と都市 社会	出版社名: 思文閣出版	権威ある出版社から全306ページの学術書 を出版した。これまでとは異なる都市や空間 という視点から近世朝廷並びに社会構造を解 明しようとしている点が評価され、建築・都 市史学だけでなく、近世日本史学の進展に貢 献しており、複数の学術誌に書評が掲載され た。
藤 智亮	育児支援のための 電動ベビーベッド の開発	日本設計工学 会誌 設計工 学	各種振動や音刺激が乳児に及ぼす鎮静効果 を科学的に探求した。その成果は揺動型ベ ビーベッド「スイマ」の製品化につながり、さ まざまなメディアで紹介され、社会的に大き な注目を集めた。

中島祥好、佐々木隆之、上田和夫、レメイ、ジェラード.B.	聴覚の文法	出版社名： コロナ社	聴覚系によって音を捉えるとき、「音事象」が「音脈」というまとまりとなって知覚される。これに関して「始部」「終部」「持続」「空白」という「音要素」が言語における文法のような簡単な文法によって時間方向に結び付けられるという理論を構築し、日本音響学会が編集する学術書シリーズの一巻として刊行した。本書の概要は Acoustics Australia 誌に英語で紹介された(2014年8月)。本書の内容に関連する音声強調技術の特許4件について本中期計画中に審査請求を行い、いずれも登録に至った。その成果に基づき、本田技術研究所、NTTコミュニケーション科学基礎研究所と、関連技術の実用化に関する共同研究を行っている。
古賀徹	理性の暴力 日本社会の病理学	出版社名： 青灯社	権威ある出版社から全399ページの学術書を出版した。伝統ある学術的書評誌「図書新聞(3153号、2014.4.5)」の一面トップに紙面の4分の1を超えるスペースにて書評されるなど、高い評価を受けた。西日本新聞に著者インタビューが大きく掲載された他、共同通信の取材を受け、全国的に大きく紹介され注目を集めた。

## 2-1-(2) 学部・研究科等の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴

研究成果の学術面、社会・経済・文化面での特徴を資料22、23に示す。個人に適合するデジタル・インタフェース、社会的インタフェースであるピクトグラム、弱者の社会的包摂を目指すインクルーシブデザイン、地域社会の文化の振興や環境の保全を目指した研究等、デザインの方法論的研究が学術面の特徴である。社会・経済・文化面では、デザイン実践を通して研究成果を還元することが本研究院の特徴となっている。例えば、公共空間のインクルーシブデザインは、本研究院の学術・社会・文化にまたがる大きな研究テーマであり、福岡市の地下鉄のサインシステムの監修といった巨大なプロジェクト(資料23、太字部分)や、博物館といった五感を刺激する施設のデザイン(資料22、太字部分)など特徴的な成果がある。高齢者、障害者等の弱者の生活・行動に対してデザインの力で貢献する研究は本研究院の強みである。快適な公共空間を中心に住みよい街づくりを行い、さらに都市のブランド作りのような社会・経済・文化的な総合デザインにより、地域自体にも貢献している。新しいメディア、コンテンツの開発や文化の保存にも貢献している。

学術面及び社会、経済、文化面からの評価は資料24、25から明らかである。6年間で学術・文化45件、作品44件の受賞を数え、基礎から応用まで幅広い分野で研究活動が高い評価を得ている。

以上、研究成果はOPに沿う。

## ○資料22 研究成果の学術面での特徴を示す研究成果

研究者	タイトル	研究概要	外部からの評価
平井康之	博物館におけるインクルーシブデザインの研究	本研究では、博物館の公共施設としてのあり方について、インクルーシブ(社会的包摂)デザインの手法を用い、博物館学芸員・研究者と来館者双方の視	2014年学芸出版より出版された『インクルーシブデザインとは何か』の監修を担当した。執筆者は平井康之をはじめジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら。「インクルーシブデザイン」は、日経BP社が発刊する日本を代表するデザイン誌「につけいぞい

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

		点から解決すべき課題を整理し、体系化を行うことで新たな市民参加型ミュージアムモデルを構築することを目的とする。この研究は展示のみならず、博物館の4つの柱である資料の収集・保存、調査・研究、展示、学習・普及を対象とした総合的な研究である。	ん」2014年11月号「デザインシンキング」特集号にて、「デザイン思考を理解する8冊」に選定、またデジタルファブリケーションの日本の拠点であるファブラボ鎌倉による「よりよく動向を理解するための推薦図書」9冊にも選ばれるなど ( <a href="http://www.fablabkamakura.com/#!media/c1hfm">http://www.fablabkamakura.com/#!media/c1hfm</a> )、ソーシャルイノベーションにおける重要図書として認知されている。
尾本章	地域の音楽文化創成のための文理融合的視点による持続可能なコンテンツの提案	地域における音楽文化創成のための持続可能なコンテンツを提案することを目的とした研究である。この実現のために、(1)現在の公的な枠組みの調査、(2)国内外の現状調査、(3)音楽施設の性能の工学的調査、(4)演奏に工学的な技術を取り入れる可能性の追求、(5)具体的なコンテンツ提案、を行った。	芸術工学研究院において開発した反射率可変の音響壁面システムを実際のコンサートに応用し、工学的発明を芸術的な表現の場にも用いる可能性の検証を行った論文である。Forum Acusticumという国際音響学会議、建築音響部門での招待講演として発表した。またそのコンサートは芸術工学府ホールマネジメントエンジニア育成プログラムにおけるプロジェクトとして実施したものである。工学的な考察結果を実験室における実験のみでなく、表現の場にも持ち込めることを証明した意義は大きい。また九州の名産として知られる焼酎の発酵音を高感度マイクで収集し、新作の現代神楽と一体化させた形で、それをこの音響システムでホール全体に響かす試みを実施した。現代神楽に見入っていた観客は、最後に自分が甕の中で発酵しているかのような感覚に捉われる。地域の特産物を題材にした斬新なコンテンツは、福岡の新聞各紙・テレビ各局でも大きく取り上げられた。
伊原久裕	アイソタイプから国際標準化ピクトグラムまでの視覚記号の歴史に関する研究	現代のピクトグラムの歴史的過程を、その先駆の「アイソタイプ」に遡って追跡した研究で、米国、日本を中心にそのデザインと同時代の社会背景について調査分析を行った。アイソタイプは1930年代アメリカで主として公共事業のための広報用に広く用いられたが、戦後忘却された。戦後では1960年代の日本において、アイソタイプが再発見され、その影響のもとで、東京オリンピックに代表されるピクトグラムのデザインが注目されるに至ったことを実証した。	(1) <i>Isotype in America</i> , ISOTYPE: Design and contexts, Christopher Burke, Eric Kindel, Sue Walker eds. Hyphen Press (London), 2013, pp298-353 (2) 『1960年代の日本のグラフィックデザインにおけるアイソタイプの受容』デザイン理論V01.64, 2014, pp9-22. (1)はレディング大学(英国)のTypography & Graphic Communication学科で実施されたISOTYPE REVISITプロジェクトの報告書に寄稿し、査読のうえ掲載された論文で、同報告書はアイソタイプ研究の決定版としての国際的評価を受けている。(2)は、意匠学会の2014年度の学会賞(論文賞)を受賞した論文である。(1)と(2)はともにピクトグラムの先駆として知られるアイソタイプの影響を追跡した内容であり、(1)では、ニューディール期のアメリカで政府エージェンシーを中心に大いに活用されたアイソタイプの実情を明らかにした。アイソタイプは戦後になって忘却されるが、1960年代の日本において注目され、1964年の東京オリンピックのピクトグラムのデザインに影響を与えたことを(2)において詳細に論じた。いずれもデザイン史上の新知見であるのみならず、アイソタイプの考案者が哲学者・経済学者であったことから、哲学や経済学の専門家からも関心を集めた。
朝廣和夫、包清博之、谷正和	研究テーマ:「中山間地域のレジリエンス向上に関する研究」	中山間地域では、急速な少子高齢化、過疎化、自然災害の激甚化などに伴って、社会基盤の崩壊や更新への危機が顕在化している。このような地域を対象に、自律的なレジリエンス(再生・回復・復元力など)の向上	本研究は、朝廣准教授が中心となって調査・研究したものであり、平成24年九州北部豪雨による中山間地の被害を踏まえ、被災前から農林地の保全活動を展開するNPOや地域組織の平常時からの取り組みを災害時にも継続的に展開可能とする農林地復旧支援モデルの構築を目的とした一連の学術研究論文である。これらの内容は、共助による農地復旧支援の条件を明らかにすることが期待され、文部科学省の戦略的創造研究推進事業として採択され、委託された研究成果を含む。



		に向け、再生可能エネルギーの一つである小水力発電の活用可能性や、平成24年7月九州北部豪雨に見舞われた八女市・うきは市を対象とした農地の被災分布と復旧支援に入ったボランティアの活動の動態について明らかにした。	
牛尼剛聡	ユーザ適合型インタフェースの研究	本研究は、インターネット上に存在する膨大なデジタルコンテンツから、ユーザにとって価値が高いコンテンツを選別するためのユーザ適合型インタフェースに関するものである。具体的には、電子書籍小説を対象として、オンラインレビューを用いて、効率的な立ち読みを実現する開発した。また、SNSストリームや商品リストを閲覧する振る舞いからユーザの興味や意図を自動的に抽出し、効率的な閲覧を実現するインタフェースを開発した。	本研究の成果としての代表的論文は次の3つである。 (1) Soichi Murai, Taketoshi Ushiyama "Review-based recommendation of attractive sentences in a novel for effective browsing" International Journal of Knowledge and Web Intelligence, Vol. 3, No. 1, 2012, pp58-69 (2) 土岐真里奈、牛尼剛聡『ソーシャルストリーム閲覧時の振舞いを利用したユーザプロファイル構成手法』情報処理学会論文誌：データベース (TOD) 6巻4号、2013, pp35-45 (3) Hong Yan Taketoshi Ushiyama "Effective Browsing Technique based on Behavioral Collaborative Filtering on Social Streams" Procedia Computer Science, Vol. 34, 2014, pp1702-1710 上記の論文をはじめ、これに関連するユーザ適合型インタフェースに関する研究により、第5回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム優秀インタラクティブ賞、第6回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム優秀インタラクティブ賞、第7回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム最優秀インタラクティブ賞、12th International Conference for Asia Digital Art and Design Best Paper Award 等を受賞した。

## ○資料 23 研究成果の社会、経済、文化面での特徴を示す研究成果

研究者	タイトル	研究概要	外部からの評価
松隈浩之	高齢者を対象としたリハビリ・ヘルスケア用シリアスゲームに関する研究	本研究では、高齢者を対象にしたリハビリ・ヘルスケア用ゲームの研究開発を行う。ゲームによる健康維持・向上効果、及び高齢者に受け入れられやすいゲームデザインについて明らかにすることで、医療分野でのゲーム利用の有用性を示し、日本のゲーム分野の拡大と、医療、介護に関する社会保障費の削減へと繋げていくことを目的としている。	ヘルスケアを目的とした高齢者向けコンテンツ『ロコモでパラミング』は、2014年度のアジアデジタルアート大賞展にて入選し、関連する別のシリアスゲームコンテンツ『樹立の森リハビリウム』も2011年度、同展の産業応用部門で特別奨励賞を獲得している。また、これらはNHK『おはよう日本』をはじめ多数のメディアで紹介されており2013年に商品化され、現在日本の約50施設で利用されている。また『起立-着席訓練のためのリハビリテーション用シリアスゲームの研究開発』は、2011年に情報処理学会に掲載された論文である。情報技術とエンタテインメントの融合に関する研究は学术界、産業界にとって関心が高く、関連する論文「起立-着席訓練のためのリハビリテーション用シリアスゲームの介護老人保健施設への導入」は2013年度、情報処理学会メディア知能情報領域で山下記念研究賞を受賞している。
佐藤優	都市環境のユニバーサルデザイン	都市において多様な障がいを持つ人が円滑に行動できるようにするための	視覚障がい者を中心に各種障がい者のための都市における生活環境を充実させる方法の研究及び実践的指導に関して、1995年から取り組んでいる。その象

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

	デザイン	指針を検討し、福岡市の方針を策定し、交通機関や施設等で応用する実践的研究を行っている。視覚障がい者等の障がい者との連携や調整をはかり、設計例として福岡市地下鉄七隈線（現在も博多駅までの延伸計画）、指針策定の例として福岡市施設整備マニュアルなどがある。	徹的な成果が福岡市地下鉄七隈線のトータルデザインであり、グッドデザイン賞、日本サインデザイン協会 SDA 賞サインデザイン大賞などを受賞した。障がい者を対象にした研究の基盤を着実に積み重ね、障がい者団体等をまとめ、さらに法的背景を整備し、その上でデザインとしてトータルに成果としてまとめあげた希有な事例である。この成果は全国及び世界に大きな影響を与え、鉄道関係の各賞を多数受賞し、方法の一部は東京の地下鉄に波及したり、クウェートの大使が見学に来てクウェートで大きな話題になるなど、社会的な反響も大きかった。
森田昌嗣、曾我部春香	JR博多駅ビルと博多口駅前広場の再整備計画	2011年3月の九州新幹線全線開業にあわせJR博多駅ビルと博多口駅前広場の再整備が行われた。これまでの駅前広場の多様な課題を解決し、九州・アジアの玄関口にふさわしい、福岡・博多の魅力を象徴するような広場づくりを目指した。街の賑わいの核となり、街の文化を育むような、市民のための広場を創造した。	2011年度グッドデザイン（商業・産業用途の建築物、空間。公共用地の建築物、空間。土木・環境整備・地域開発・都市デザインの分野）に応募し、グッドデザイン賞を受賞した。＜掲載誌：GOOD DESIGN AWARD 2011、p.581、日本デザイン振興会、宣伝会議、2012年3月＞ ＜ <a href="http://www.g-mark.org/award/describe/38048">http://www.g-mark.org/award/describe/38048</a> ＞ ＜平成23年10月5日の西日本新聞と、平成23年10月6日の朝日新聞にグッドデザイン賞受賞の記事が掲載＞ 第1回 JUDI パブリックデザイン賞（都市環境デザイン会議（JUDI）主催、国道交通省等後援）に応募し空間賞を受賞した（平成23年10月）。＜ <a href="http://www.judi.gr.jp/archives/pd-award/pd01_2011.pdf">http://www.judi.gr.jp/archives/pd-award/pd01_2011.pdf</a> ＞
上岡玲子	空気砲を活用した「インタラクティブお参りシステム」	本研究は空気の密度を制御し任意の渦輪を生成することで人の生体情報の制御を目指したインタフェースを実現することで、外部からの触覚情報により人間の感覚がどれくらい変容するのか定量的に評価し触覚デザインの機序を明らかにすることを目的としている。	本研究は特に圧縮空気を使用した非接触の触覚ディスプレイの開発とそれをシアター視聴システムへと応用し評価したことが高く評価された。そのシステムを応用し、新しいインタラクティブインタフェースを「おみくじのシステム」として完成させた。2013年電子情報通信学会 HCG（ヒューマンコミュニケーショングループ）シンポジウムで「空気メディア」のオーガナイズドセッションにおいて空気を使ったこれまでにないインタフェースということが評価されオーガナイズドセッション賞を受賞した。本研究はその後も改良を続け、2014年のアジアデジタルアート大賞展での入賞なども果たした。
都甲康至	地域価値を高める都市ブランド戦略に関する研究	本研究では、市民の地場産品や観光地等に関する意識調査や先進都市の類似事例研究、地域資源調査等を通じて、都市の認知度とイメージの向上を図る都市ブランドを確立し、推進するために必要な基本理念とブランド価値の定義を行い、地域産業政策、認証制度、推進体制等の要件検討を行うとともに、都市ブランドの確立推進を図るための戦略ビジョンや戦略推進事業等を「都市ブランド戦略」として編集・体系化を行った。	唐津市で平成25年3月に策定された「唐津ブランド戦略」は、本研究の成果で得られた知見をもとに筆者が原案の大半を執筆し、市の公的なブランド戦略として、現在でも市の公式ホームページでも公開されている。このブランド戦略に基づき、戦略の推進機関として「唐津ブランド確立推進協議会」が平成25年6月に組織され、その第1回会議で「産品唐津ブランド認証要綱」と「産品唐津ブランド認証審査委員会」が策定された。そして、平成26年2月に第1回の産品唐津ブランドの募集が行われ、同年8月に12産品が認証され、平成27年7月1日から第3回の募集が行われている。これらの概要については「唐津ブランド確立推進協議会」のホームページで公開されている。さらに、総務省の平成24年度補正予算 ICT 街づくり推進事業に「唐津ブランド戦略支援型、防災・減災システム」が採択され、平成25年度に事業実施が行われた。この概要は総務省の ICT 街づくり推進会議の中で公開されている。このように、本研究は唐津市の産業政策に影響を与え、地域社会・経済の発展に大きく寄与しており、社会、経済、文化的意義を有するといえる。
金大	主體的鑑	本研究では、次世代型博物	本研究では、これまで行ってきたミュージアム来館

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

雄	賞と評価還元を可能にする「パーソナルミュージアムコンシェルジュ」の開発	館に向けたインタラクティブな自動誘導機能が付加された展示解説コンテンツと、その展示を効率的に評価できる展示評価支援システムの開発を行った。実証結果から、デジタルコンテンツは子供が抵抗を抱かずに、博物館に触れるきっかけとなること明らかとなった。コンテンツの面では、音声解説のほかに写真や映像、3DCGに至るコンテンツの構成は来館者に好まれ、興味を持続させるための手がかりとなること確認できた。	者の行動評価と対話型コンテンツ開発のノウハウや、国内外のデジタルコンテンツにおける活用の実践調査を踏まえ、年齢や訪問目的など来館者それぞれの状況に合わせた最適な閲覧ルートのプラン設計が自動的に行われ、展示場内において来館者が一部に滞留しない効率的なルートデザインが自動的に瞬時に組まれる、来館者や展示企画者それぞれに優しいシステム”パーソナル・ミュージアム・コンシェルジュ”の開発と実証実験を行った。また本手法や検証内容は、西日本新聞（平成22年12月）とRKB毎日放送（同年12月）で取り上げられ、「若年層を中心とした施設ミュージアム離れが進む中、デジタル技術によるガイドで、特に若年層の博物館への関心を高めることができた」等の高い評価を受けている。
脇山真治	展示映像の記録・保存に関する研究	本研究は劇場映画やテレビ番組のような国際標準に準拠しない特殊な映像である「展示映像」がなぜ保存されないのかに着目した。マルチ映像を中心に、大型映像、立体映像などに国際博覧会等のために制作・上映された映像の現状、原版の所在を調査し、どのように恒久的に保存が可能かのシステム提案をめざした。本研究をとおして1970年日本万博での政府館映像の原版発見、マルチ映像（スプリットスクリーン）の系譜の明示、展示映像保存の現状等を明らかにした。	本研究は、2007年に開催された国際フィルムアーカイブ連盟の東京大会にて、「日本万国博覧会の日本館で上映された8面マルチ映像の市川崑監督作品『日本と日本人』の関係資料は現存しない」という報告が契機となってスタートした。約6年の歳月をかけてこのフィルム原版を東京で発見し先の(2)での発表と同時期に(1)においてマスコミ発表した。朝日新聞(2013.06.17)、毎日新聞(2013.06.15)、読売新聞(2015.06.15)、日本経済新聞(2013.06.30)、西日本新聞(2015.06.30)等の掲載を確認している。この成果は科研費の挑戦的萌芽研究(課題番号24652037)によるものである。資料発見によって廃棄散逸が当たり前であった「展示映像の記録・保存」の重要性が認識されるようになり、現在の科研(B)(課題番号15H02875)の継続研究へと至っている。さらに本研究はJSTの了解のもと、1985年つくば科学万博の「歴史館」上映作品のフィルムコンテンツの全てを、九大芸術工学研究院にて、継続的に保管するために全資料の受入れにつながっている。また調査の過程では展示映像の一種である「マルチ映像」が映画にも応用されていることを、(3)のとおり時間軸にそって系統立てて位置づけるという副次的な成果もまとめることができ論文として発表した。本研究は「展示映像のアーカイブセンター構想」を展望して進行中である。

## ○資料24 受賞件数（大学評価情報システムより抜粋）

受賞年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
件数	12	12	12	19	18	16

## ○資料25 教員の主要な受賞状況（大学評価情報システムより抜粋）

年月	部門	受賞者	賞の名称	授与組織名	国内／国際	受賞内容
2010年5月	デザイン人間科学部門	梶原 裕	SHASE 技術フェロー	空気調和・衛生工学会	国内	

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2010年 5月	デザイン 人間 科学部 門	須長正治	日本色彩学 会論文賞	日本色彩学 会	国内	日本色彩学会誌に掲載された論文 須長正治、田中秀幸：2色色彩テ クスチャからの全体的印象色に及 ぼす色相差と要素サイズの影響 日本色彩学会誌、33 pp.230-238 が高く評価された。
2010年 8月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	平井康之	第4回キッ ズデザイン 賞（キッズ サポート部 門）	キッズデザ イン協議会	国内	「こどもお薬手帳けんこうキッ ズ」に対する受賞
2010年 10月	デザイ ン人間 科学部 門	高木英行	EEE Most Active SMC Technical Committee Award	IEEE Systems, Man, and Cybernetics Society	国際	IEEE Systems, Man, and Cybernetics SocietyのTechnical Committeeの中で2009年度に最も 活動が盛んであったTechnical CommitteeのChair(s)に贈られる 賞
2010年 10月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	森田昌嗣	平成22年 度 グッド デザイン賞	財団法人 日本産業デ ザイン振興 会	国内	設計作品「九州川標プロジェクト （「水郷ひた」川標プロジェクト 含む）」で受賞
2010年 10月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	森田昌嗣	平成22年 度 グッド デザイン賞	財団法人 日本産業デ ザイン振興 会	国内	設計作品「熊本県阿蘇郡小国町の ための地図、観光案内サイン、リー フレット」で受賞
2010年 10月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	曾我部春 香	グッドデザ イン賞	財)日本産業 デザイン振興 会	国内	九州川標プロジェクト
2010年 10月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	曾我部春 香	グッドデザ イン賞	財)日本産業 デザイン振興 会	国内	熊本県阿蘇郡小国町のための地 図・観光案内サイン、リーフレッ ト
2010年 11月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	中村滋延	福岡市文化 賞	福岡市	国内	福岡における芸術文化創造への貢 献
2010年 11月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	伊原久裕	2010年度 グッドデザ イン賞	(財)日本産 業デザイン 振興会	国内	熊本県阿蘇郡小国町のための地図 システム、観光ガイドリーフレッ ト、観光案内サインのデザイン
2010年 11月	デザイ ンスト ラテジ 一部門	池田美奈 子	グッドデザ イン賞	財団法人日 本産業デザ イン振興会	国内	地図に主眼を置いた情報媒体のデ ザインによる地域イメージの創出 熊本県阿蘇郡小国町のための地図 システム 観光ガイドリーフレッ ト、観光案内サインのデザイン
2011年 3月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	牛尼剛聡	優秀インタ ラクティブ 賞	電子情報通 信学会デー タ工学研究 専門委員会、 日本データ ベース学会、 情報処理学 会データベ	国内	第3回データ工学と情報マネジメ ントに関するフォーラム (DEIM2011)における発表「I 隙 間時間視聴時の打ち切りを考慮し た動画ニュース番組の構成手法」 に対して受賞

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

				ースシステ ム研究会		
2011年 5月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	源田悦夫	日本図学会 研究論文賞	日本図学会	国 内	論文概要： 本論文では、近代以降の西洋絵画 を中心とした絵画の視覚的特徴に 着目した分析、及びそれに基づい た視覚対象モデルのパラメータ変 換による絵画風画像生成手法につ いて示した。
2011年 7月	コミュ ニケー ション デザイ ン科学 部門	原 健二	第14回画 像の認識・ 理解シンポ ジウム (MIRU) 優 秀論文賞	情報処理学 会 CVIM 研究 会	国 内	
2011年 8月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	鶴野玲治	Paper Award : Honorable Mention	ACM SIGGRAPH/Eu rographics Symposium on Computer Animation 2012	国 際	he organizer of the ACM/Eurographics Symposium on Computer Animation (SCA) 2011 are delighted to award Ryoichi Ando and Reiji Tsuruno an Honourable Mention for their paper A Particle-based method for Preserving Fluid Sheets SCA2011 is held at British Columbia University, Vancouver, Canada, Aug. 7, 2011
2011年 8月	デザイ ンスト ラテジ ー部門	森田昌嗣	南京国際デ ザインコン ペティショ ン2011 優 秀指導教員 賞受賞	“南京創造” デザインコン ペティショ ン組織委 員会、南京理 工大学及び 江蘇省工業 設計学会（中 国）	国 際	南京国際デザインコンペティショ ン2011において本学の学生が制 作した「意識的行為に着目したス トリートファニチャーの提案」が 金賞（最高賞）受賞するなど、学 生指導に関して評価され優秀指導 教員賞を受賞
2011年 9月	環境・ 遺産デ ザイン 部門	谷 正和	BENJapan Environmen tal Award 2011	Bangladesh Environment al Network Japan	国 内	“for his splendid efforts and outstanding contributions for various environmental aspects of Bangladesh & other countries”
2011年 10月	デザイ ンスト ラテジ ー部門	森田昌嗣	平成23年 度 グッド デザイン賞	公益財団法人 日本デザ イン振興会	国 内	設計作品「博多駅博多口駅前広場」 で受賞
2011年 10月	デザイ ンスト ラテジ ー部門	森田昌嗣	第1回 JUDI パブ リックデザ イン賞・空 間賞	都市環境デ ザイン会議	国 内	設計作品「博多駅博多口駅前広場」 で受賞
2011年 10月	デザイ ンスト ラテジ ー部門	曾我部春 香	グッドデザ イン賞	公益財団法人 日本デザ イン振興会	国 内	博多駅博多口駅前広場：2011年3 月の九州新幹線全線開業にあわせ て整備がすすめられた博多駅博多 口駅前広場に対しグッドデザイン 賞を受賞。

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2011年 10月	デザイン ストラテジ 一部門	曾我部春 香	第1回 JUDI パブ リックデザ イン賞・空 間賞	都市環境デ ザイン会議	国内	設計作品「博多駅博多口駅前広場」 で受賞
2012年 1月	デザイン ストラテジ 一部門	田上健一	第28回住 まいのリフ ォームコン クール・優 秀賞(分界 稜の家)	公益財団法 住宅リフォ ーム紛争処 理支援セン ター	国内	
2012年 2月	コンテ ンツ・ク リエーテ ィブデザ イン部 門	金 大雄	特別賞	北九州デジ タルクリエ ーターコン テスト2012	国内	
2012年 2月	コンテ ンツ・ク リエーテ ィブデザ イン部 門	石井達郎	特別賞	北九州デジ タルクリエ ーターコン テスト2012	国内	門司港駅舎における3Dプロジェ クションマッピング作品「門司港 駅におけるデジタル表現～ありが とう門司港駅～」
2012年 4月	デザイン ストラテジ 一部門	秋田直繁	universal design award 2012	universal design GmbH, iF Internation al Forum Design GmbH	国際	
2012年 5月	デザイン 人間 科学部 門	安河内朗	優秀論文賞	日本生理人 類学会	国内	
2012年 7月	デザイン ストラテジ 一部門	鶴飼哲矢	グッドデザ イン賞	公益財団法 人日本デザ イン振興会	国内	社会貢献のデザイン活動に関する ディレクション
2012年 7月	コミュニ ケーション デザイン 科学部 門	井上光平	論文査読功 労賞	映像情報メ ディア学会	国内	
2012年 8月	デザイン 人間 科学部 門	高木英行	最優秀論文 賞	the 5th Int. Conf. on Genetic and Evolutionary Computing (ICGEC2012)	国際	国際会議論文、Yan Pei and Hideyuki Takagi, "Comparative study on fitness landscape approximation with Fourier transform"に対する最優秀論文賞
2012年 10月	環境デ ザイン 部門	近藤 加 代子	九州大学研 究表彰	九州大学	国内	
2012年 11月	環境デ ザイン 部門	谷 正和	平成24年 度九州大学 研究活動表 彰	九州大学	国内	

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2012年 11月	環境デザイン部門	田上健一	健軍商店街 ピアクレス アーケード デザインコン ペティション・入選	健軍商店街	国内	
2012年 12月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	竹之内和樹	第6回デジタルモデリングコンテスト	日本図学会	国内	ラピッドプロトタイピングを用いて制作できる複雑な動きを持つ機構の3Dモデル制作
2013年 1月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	石井達郎	入賞	2012アジアデジタルアート大賞	国内	門司港駅舎における3Dプロジェクトマッピング作品 「Architectural Heritage of Digital Media Expression」
2013年 3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	牛尼剛聡	優秀インタラクティブ賞	電子情報通信学会データ工学研究専門委員会、日本データベース学会、情報処理学会データベースシステム研究会	国内	第5回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム（DEIM2013）における発表「ソーシャルストリームの読み飛ばしを考慮したコンテキスト適合型インタフェース」に対して受賞
2013年 3月	環境デザイン部門	吉岡智和	日本アルミニウム協会賞技術奨励賞	（一社）日本アルミニウム協会	国内	ローレット接合を用いたトラスシステム「軽量トラス」の開発
2013年 4月	デザインストラテジー部門	平井康之	IAUDアワード2013 入賞	国際ユニヴァーサルデザイン協議会	国際	
2013年 5月	環境デザイン部門	川本陽一	日本風工学会出版賞	日本風工学会	国内	都市の風環境に関する書籍（共著）“Ventilating Cities - Air-flow Criteria for Healthy and Comfortable Urban Living”に対し、風工学分野の発展に資する物と評価された。
2013年 6月	デザイン人間科学部門	安河内朗	優秀論文賞	日本生理人類学会	国内	Comparison of cardiovascular response to sinusoidal and constant lower body negative pressure with reference to very mild whole-body heating Authors: Ishibashi K, Maeda T, Higuchi S, Iwanaga K, Yasukouchi A. J Physiol Anthropol 2012, 31:30 (24 November 2012)
2013年 6月	デザイン人間科学部門	上田和夫	Twenty-five year awards	the Acoustical Society of America	国際	In recognition of twenty-five years continuous membership

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2013年 6月	コンテンツ・クリエーティブデザイン部門	鶴野玲治	Best Short-Paper Award	Nicograph International 2013	国際	Best short-paper Award for "An Interactive Tile-Based Modeling Interface", Nicograph International 2013
2013年 7月	デザインストラテジー部門	平井康之	「Champion of Inclusive Design」賞	The INCLUDE ASIA 2013 国際学会	国際	
2013年 9月	コンテンツ・クリエーティブデザイン部門	上岡玲子	バーチャルリアリティ学会論文賞	日本バーチャルリアリティ学会	国内	「風圧型顔面触覚ディスプレイのVRシアターへの応用」がバーチャルリアリティ研究の発展に貢献する優れた論文と認められた。
2013年 10月	デザインストラテジー部門	平井康之	「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞	福岡市 子ども×くすり×デザイン実行委員会	国内	
2013年 11月	デザインストラテジー部門	尾方義人	2013 福岡デザインワード入賞	福岡県産業デザイン協議会	国内	「介護浴槽」
2013年 11月	環境デザイン部門	包清博之	優秀策划人賞	2013 上海艺术设计展组委会	国際	2013 上海艺术设计展に山東工芸美術学院と協力して複数の作品ポスターを出展し、優秀策划人賞（優秀プランナー賞）を受賞した。
2013年 11月	環境デザイン部門	包清博之	最優秀研究事例報告賞	日本造園学会九州支部	国内	日本造園学会九州支部平成25年度大分大会にて、「待合せ場所の選択行動からみた都市の共同空間の計画条件に関する研究」を西舞香（大学院修士課程芸術工学府環境・遺産デザインコース）と共著で発表し、受賞した。
2013年 12月	コンテンツ・クリエーティブデザイン部門	上岡玲子	HCG オーガナイズドセッション優秀賞	一般社団法人 電磁情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ	国内	空気メディアの現状と展望のオーガナイズドセッションにて、「空気砲を活用した『インタラクティブお参りシステム』」の口頭発表を行い研究の新規性と面白さを評価された。
2013年 12月	コンテンツ・クリエーティブデザイン部門	竹之内和樹	第7回デジタルモデリングコンテスト	日本図学会	国内	3Dプリンタでのみ作成できる新機械要素の考案・3Dモデル制作
2014年 2月	デザインストラテジー部門	尾方義人	2013 アジアデジタルアート大賞 静止画部門入賞	アジアデジタルアート大賞	国際	「おくのほそ道」



## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2014年 3月	コミュニケーションデザイン科学部門	河辺哲次	工学教育賞	日本工学教育協会	国内	教科書「工科系のための解析力学」の刊行 及び 基礎物理学と基礎数学に関する一連の著作
2014年 3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	牛尼剛聡	優秀インタラクティブ賞	電子情報通信学会データ工学研究専門委員会、日本データベース学会、情報処理学会データベースシステム研究会	国内	第6回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2014) における発表「共感ビューイング:波長の合う人とのソーシャルTVビューイング」に対して受賞
2014年 3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	松隈浩之	2013年度山下記念研究賞	一般社団法人 情報処理学会	国内	発表研究会 : エンタテインメントコンピューティング 発表年月日 : 2012/5/14 資料 No. : 2012-EC-24 論文名 : 起立-着席訓練のためのリハビリテーション用シリアスゲームの介護老人保健施設への導入
2014年 3月	環境デザイン部門	鶴飼哲矢	建築九州賞奨励作品	日本建築学会九州支部	国内	現代の大家族のための家
2014年 3月	環境デザイン部門	田上健一	九州建築賞・奨励作品賞 (宗像市立日の里中学校)	日本建築学会九州支部	国内	
2014年 5月	デザイン人間科学部門	村木里志	Best Paper Award	1st Asian Conference on Ergonomics and Design	国際	The effects of touch button size to the operability of touchscreen, Jinghong Xiong, Kiyotaka Fukumoto and Satoshi Muraki
2014年 6月	デザイン人間科学部門	樋口重和	日本生理人類学会奨励賞	日本生理人類学会	国内	Lee SI, Hida A, Tsujimura SI, Morita T, Mishima K, Higuchi S (2013) Association between melanopsin gene polymorphism (I394T) and pupillary light reflex is dependent on light wavelength. J Physiol Anthropol. 32 (1) :16.
2014年 6月	コミュニケーションデザイン科学部門	井上光平	情報・システムソサイエティ査読功労賞	電子情報通信学会	国内	
2014年 7月	コミュニケーションデザイン科学部門	井上光平	論文査読功労賞	映像情報メディア学会	国内	
2014年 7月	デザインストラテジ	平井康之	第8回キッズデザイン賞	キッズデザイン協議会	国内	「コドモトモリモトー服薬における子供のQOLのデザイン研究」

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

	一部門					
2014年 7月	デザイン ストラテジ 一部門	秋田直繁	第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）	キッズデザイン協議会	国内	
2014年 10月	デザイン ストラテジ 一部門	秋田直繁	2014年グッドデザイン賞（研究活動、研究手法）	日本産業デザイン振興会	国内	
2014年 10月	環境デザイン 部門	鶴飼哲矢	グッドデザイン賞		国内	名駅南ランドビル デザイン監修
2014年 10月	環境デザイン 部門	鶴飼哲矢	グッドデザイン賞	公益財団法人日本デザイン振興会	国内	SAZAE HOUSE の設計
2014年 11月	デザイン人間 科学部門	村木里志	The Best Paper Award	Biomedical Fuzzy System Association	国際	"Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps" International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Science, Vol.19, No. 1, pp.17-22 (Author Hiroko Noto, Satoshi Muraki)
2014年 11月	コンテンツ・ クリエイティブ デザイン部門	牛尼剛聡	Best Technical Papers	Asia Art and Design Association	国際	The 12th anniversary ADADA 2014における論文「A Study on Estimation of The Preference on A Product Based on User Behaviors on Smartphone」に対して受賞
2015年 1月	コンテンツ・ クリエイティブ デザイン部門	上岡玲子	電子情報通信学会 MVE賞	一般財団法人 電子情報通信学会	国内	デジタルコンテンツの中でも広く流通する映像コンテンツの面白さを高める手法として本研究ではバイオフィードバックと同期現象に着目し、ホラー映画を視聴中のユーザーの心拍数に合わせて振動を提示する装置による引き込みの影響を検討している。被験者実験を通じて、ユーザーの心拍数に影響を与えるために高い心拍数を提示することで、コンテンツ視聴中の被験者の心拍数を高く保てる効果が観察されている。本研究は、今後のデジタルコンテンツの応用の在り方を考える上で、有益な研究であり、将来の発展が期待される。よって、MVE賞に推薦する。
2015年 2月	デザイン ストラテジ 一部門	尾方義人	2014アジアデジタルアート大賞 静止画部門 入賞	アジアデジタルアート大賞	国際	irrational number
2015年 3月	コミュニケーション	尾本章	環境音響研究賞	日本音響学会	国内	音場の計測・評価・制御に関する一連の研究

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

	デザイン科学部門					
2015年3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	上岡玲子	電子情報通信学会 MVE賞	一般財団法人 電子情報通信学会	国内	本研究ではオフィスワークにおける眠気や集中力低下状態の緩和を目的とし、空気砲の原理を利用してユーザへ働きかけるインタフェースを提案している。触覚刺激に敏感であると知られる頬に空気玉をあてるというアイデアは周囲に影響を与えずに個人にのみ働きかけるという意味で優れているだけでなく、空気玉の速さや衝撃をコントロールすることにより、ユーザへの多様な働きかけができる可能性があり興味深い。これらの多様な可能性や、より複雑な作業に対する反応などについては更なる調査が待たれる面があるものの、報告にある実験の中でも特に空気玉を放つ間隔の違いが引き起こす効果の違いなどの結果は示唆に富んでおり、この基礎的なデータは関連する後続の研究に大きく資するものであると考えられる。以上より、本研究を MVE 賞に推薦する。
2015年3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	牛尼剛聡	最優秀インタラクティブ賞	電子情報通信学会データ工学研究専門委員会、日本データベース学会、情報処理学会データベースシステム研究会	国内	第7回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2015) における発表「SNSによる文化と風土の可視化」に対して受賞
2015年3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	牛尼剛聡	優秀インタラクティブ賞	電子情報通信学会データ工学研究専門委員会、日本データベース学会、情報処理学会データベースシステム研究会	国内	第7回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2015) における発表「ソーシャルビューイングにおける盛り上がりの効果的な提示のためのツイート集約化手法」に対して受賞
2015年3月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	牛尼剛聡	日本データベース学会若手功績賞	日本データベース学会	国内	
2015年4月	デザインストラテジー部門	齋藤俊文	毎日広告デザイン	毎日新聞社	国内	
2015年5月	デザイン人間	樋口重和	日本生理人類学会 優	日本生理人類学会	国内	光の非視覚的作用に関して特にメラノプシン遺伝子多型との関連を

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

	科学部門		秀研究賞			明らかにした研究成果が認められた。
2015年5月	デザインストラテジー部門	平井康之	2014年度グッドデザイン賞	公益財団法人日本デザイン振興会	国内	研究活動・研究手法の категория において受賞
2015年6月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	伊原久裕	2014年度意匠学会論文賞	意匠学会	国内	64号掲載の論文『1960年代の日本のグラフィックデザインにおけるアイソタイプの受容』に対して。2014年度の学会誌掲載論文12編（研究報告含む）の中から選定された。
2015年6月	デザイン人間科学部門	村木里志	日本人間工学会研究奨励賞	日本人間工学会	国内	「松葉杖のグリップ径が杖使用時における手部の負担に及ぼす影響. 人間工学 50 (5) : 286-293」に対して受賞
2015年6月	デザイン人間科学部門	村木里志	日本人間工学会研究奨励賞	日本人間工学会	国内	「パーキンソン病患者の椅子からの起立動作の特徴. 人間工学 50 (5) : 265-270」に対して受賞
2015年6月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	鶴野玲治	優秀研究発表賞	情報処理学会グラフィックスCAD研究会	国内	「異なる視点から描かれたイラストからの2.5Dモデル生成」, 情報処理学会研究報告. グラフィックスとCAD研究会報告 2014-CG-156, No. 7, 1-6, 2014-9-16 に対する受賞
2015年7月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	松隈浩之	平成27年「ヘルスケア産業づくり貢献賞」九州経済産業局長賞	九州ヘルスケア産業推進協議会	国内	ヘルスケア産業に関する九州地域の先導的な取組・活動の中から、需要づくり及び供給力の向上に貢献したモデル性の高い取組として表彰された。
2015年9月	コミュニケーションデザイン科学部門	浦濱喜一	産業応用工学会賞	産業応用工学会	国内	産業応用工学会全国大会2015にて発表した論文が、発表論文中最も高い評価の2件のうちの1つとして選出された。
2015年9月	コミュニケーションデザイン科学部門	小野直樹	産業応用工学会賞	産業応用工学会	国内	産業応用工学会全国大会2015にて発表した論文が、発表論文中最も高い評価の2件のうちの1つとして選出された。
2015年11月	コンテンツ・クリエイティブデザイン部門	工藤達郎	第23回福岡県文化賞（奨励部門）	福岡県	国内	独自のプログラムにより制作したプロジェクションマッピングは、投影対象が移動や回転を行っても映像が追従する、極めて高い技術力・独創性を有する作品であり、個性的・独創的な創作活動を行い、将来一層の活躍が期待されるものとして表彰された。
2015年11月	デザインストラテジー部門	尾方義人	2015福岡デザインワード大賞	福岡県産業デザイン協議会	国内	アイスリットテープディスプレイ

## 九州大学芸術工学部・芸術工学研究院 分析項目Ⅱ

2016年 1月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	牛尼剛聡	Honorable Paper Award	ACM IMCOM 2016 プログ ラム委員会	国 際	この論文は世界で最も権威あるコンピュータ関係の学会である ACM が主催する国際会議 International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication 2016 において、唯一の論文賞である Honorable Paper Award を受賞した。この国際会議は世界中から投稿された 305 件の論文の中から会議に採択された 107 件の論文の中で最も優秀であると表彰された。
2016年 1月	環境デ ザイン 部門	鶴飼哲矢	愛知まちな み建築賞	愛知県	国 内	新城 道の駅
2016年 3月	コミュニ ケーショ ンデザ イン科学 部門	鎗木時彦	佐藤論文賞	日本音響学 会	国 内	対象論文 Tokihiro Kaburagi A method for estimating vocal-tract shape from a target speech spectrum Acoustical Science and Technology vol. 36, no. 5, pp. 428-437, 2015. doi:10.1250/ast.36.428
2016年 3月	コンテ ンツ・ クリエ ーティ ブデザ イン部 門	松隈浩之	ビジネスベ ストセレク ション入賞	健康科学ビ ジネス創造 フォーラム	国 内	

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

組織単位で判断した研究成果の質は前掲資料 19 (13~14 頁) の通り MP に沿って設置した応用知覚科学研究センター、応用生理人類学研究センターによる論文を中心に国際的に高い評価を受けている。これは OP に沿う。

学術面及び社会、経済、文化面での特徴については資料 22、23 (15~19 頁) のようにデザインの方法論、実践において他の研究院とは際立った違いがある。これらの社会・文化的貢献は OP に沿う。

さらに資料 24、25 (19~29 頁) に示す受賞リストにより、学術とデザイン実践の両面における社会からの高い評価がわかる。

以上によりリサーチポリシー実現の観点から研究成果の状況は優れており、本研究院で想定する関係者の期待する水準を上回ると判断する。

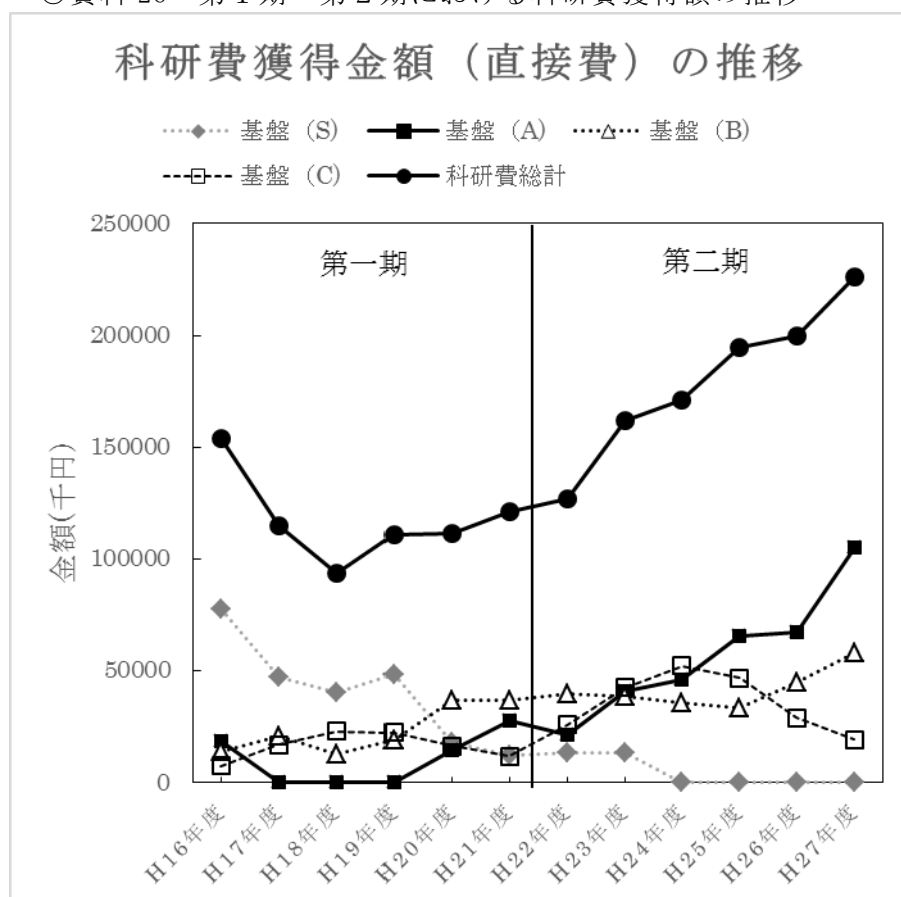
### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

科研費獲得金額は年々増加し（資料 26）、第 2 期終了時には第 1 期終了時の 1.86 倍に達した。第 1 期は少数の基盤（S）に負っていたが第 2 期は基盤（A）、（B）獲得の飛躍的増加が貢献した。本研究の主研究領域である「デザイン学」の細目においては、通算採択総数 39 件と全国 1 位で 2 位大学の 17 件を大きく上回り、特に大型になるほど本研究の強さが顕著である。

他の外部資金を含めて第 1 期の 2 億円規模から第 2 期は 3 億円規模となった。

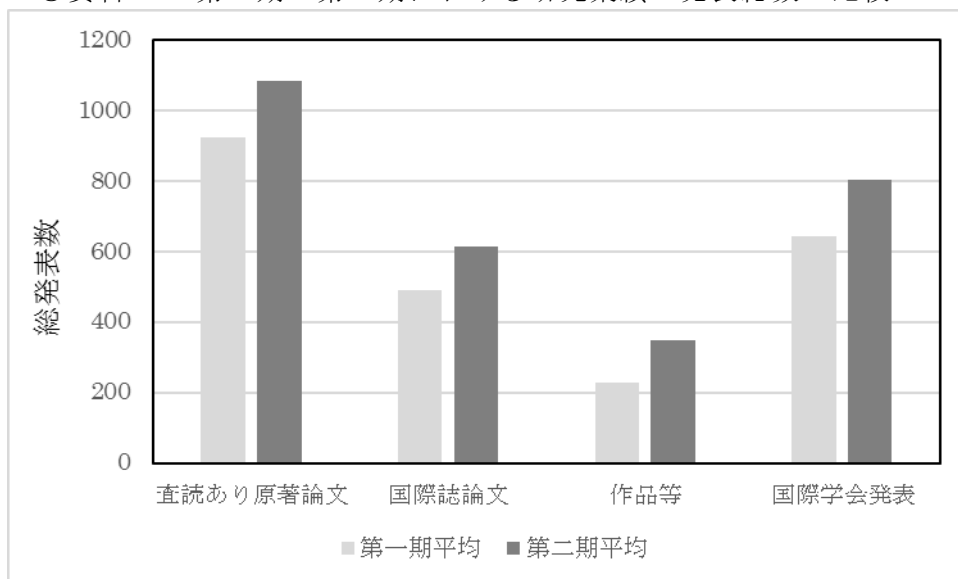
#### ○資料 26 第 1 期・第 2 期における科研費獲得額の推移



#### (2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

第 1 期と比較して査読あり原著論文、国際誌論文、国際学会発表、作品等の発表のいずれも第 2 期に大幅に増加した（資料 27）。学術論文と作品等の発表が双方とも伸び本研究のバランスの良い発展を示す。国際誌論文や国際学会発表の増加は本研究の OP に基づき研究の国際性が増したことを示す。教員 1 人当たりの年間業績に換算すると第 2 期での伸びがさらに際立つ（資料 28）。

○資料 27 第 1 期・第 2 期における研究業績の発表総数の比較



○資料 28 第 1 期・第 2 期における教員 1 人当たりの年間業績発表数の比較

